

このたびの東日本大震災により
被害を受けられました方々に、
謹んでお見舞いを申し上げます。
教育出版株式会社

Educo

地球時代の教育情報誌 エデュコ

No.25
2011年 春

2 巻頭インタビュー
雅楽師

東儀 秀樹さん

4 知っておきたい教育 NOW
デジタル教科書の現状と期待
高橋 純
デジタル教科書の活用と課題
井上 文敏

8 きょういく見聞録
地雷廃絶のために、自分のできることを
柴田 知佐

10 地球となかよしトビックス
多世代参加のてらこやコミュニティーが
学校・家庭・地域を結ぶ
NPO法人 鎌倉てらこや

12 インフォメーション 北から南から

14 地球となかよしゼミナール
手間ひまかかるエコ活動も
少しの工夫で楽しみながら
静岡市立賤機中小学校

15 コラム いまどきコドモ事情
子どもの不安 そのまま受けとめて
香山 リカ

16 ほっとな出会い
東洋大学陸上競技部
柏原 竜二さん



とうぎ
東儀
ひでぎ
秀樹さん (雅楽師)

やってみよう、と一歩を踏み出した者にだけ
得られる可能性があるのです。

学生時代は、雅楽に親しむ機会はあまりなかったそうですね。

音楽が大好きで、ロックやジャズをプロでやりたいと思っていたくらいなんです。雅楽の道に進むことになるのは僕も周囲も全く思っていなかったんですよ。現在ではもう世襲制でもないです。ただ、母方である東儀家が、千三百年間雅楽を継承しているという事は認識していただき、その血を受け継いでいることに対しての誇りや責任感のようなものは、中高生のころから感じてはいました。

高校を卒業して雅楽を始めるといふのは、実は例外的に年齢が遅いんです。父が商社マンで海外に住んでいた年数も長かったし、受け入れ側

には、伝統音楽の素養がないから無理だと言われていたんですよ。でも、むしろ、他のジャンルの音楽を楽しんでできたことが雅楽にも生きたんです。クラシック、ジャズ、ロック、ポップなど、雅楽と照らし合わせる素材が僕にはたくさんある。比べたからこそ見える差とか疑問を僕は感じる事ができるし、だからこそ雅楽をもっと追究したいという思いも深まったと思います。

たくさん国へ出かけ、さまざまな国の方と交流しておられますね。

他国の言語ができるというのは、コミュニケーションツールを手に入れた、ということではないと思います。どんなに流暢な英語を身につけても、例えば、外国人に「歌舞伎と

雅楽の違いって何？」と聞かれたとき、日本語で説明できないなら、英語でも説明できないでしょう。僕はある程度は英語が話せますが、それ以前に伝えたいものがいっぱいあるから、多くの国の人々とコミュニケーションを楽しんでいます。これが日本の文化だ、としっかり説明できるならば、言語が流暢でなくてもちゃんと伝わって、喜ばれる。昔ながらの風習や、伝統的なノウハウなどを知っていて、それを通訳を介しても、他国の人にきちんと伝えることができる。それこそが国際人だと思っています。

自分の国の文化をひいきに見るといふのはすごくいいこと。だからこそ、相手が相手自身の国を大ひいきしているというのも当たり前のこと

だと思える。相手が、その人の属する文化を世界一だと思っていることを、お互い様だと笑って言えるのが、本当の交流だと思えます。

さまざまなジャンルの音楽を手がける他にも、多くの趣味に本気で取り組んでいらっしゃいます。

僕はとにかく好奇心が旺盛で勝気なので、まず、できるまでとことんやってみる。どこまでできるかわくわく感があります。できないならば、どれだけできないかを知っておきたい。そうすると、できる人のすごさに敬意をもつことができます。経験した人間だからこそ、成就することの大変さがわかって、できる人に対して今度はワクワクしてしまいます。子どもたちへの雅楽の講義のと





PROFILE

東儀 秀樹

1959年東京生まれ。高校卒業後、宮内庁楽部に入る。楽部では箏箏を主に、琵琶、鼓類などを担当。ピアノやシンセサイザーとともに雅楽の持ち味を生かした曲の創作にも取り組む。陶芸、世界の民族楽器の収集、写真など、幅広い趣味をもつ。東京藝術大学邦楽科非常勤講師、上野音大、名古屋音大、池坊短大客員教授。

き、「笙を吹いてみたい人」と呼びかけると、とあんな難しそうな楽器を吹けるわけがない、ともじもじする子も多いですね。でも、僕はちゃんと吹かせる自信がありますから（笑）。音が出ると、本人が一番びつくりするし、周りの子も、自分も手を挙げればよかったとやらやましがります。そのときに、これは、勇気をもって一歩踏み出した人だけもてた喜びなんだよ。だから、音が出なくて当たり前、音が出たらどんなにすごいかわかるんだから、何でもとにかくやってみてごらんよというのを一緒に教えているんです。

僕は、いろんなことに挑戦してきて、そのことを身体で知っていますから。子どもたちには、失敗しても、やろうと思つた気持ちのまま褒めてあげると、失敗した自分も好きになれるよ、それは財産として自分の引き出しにストックされるんだよ、と言つてあげたいですね。

**子どもたちが伝統文化である雅楽に触れる機会を積極的につくつてい
らっしゃいます。**

子どもは、能動的になる空気をつくるだけで、自然に知りたい、触りたい、やってみたいと自分から動きます。ですから、雅楽の講義といつても、歴史とか、箏箏ひちりきつてこう書くとかはわざわざ教えません。例えば、

子どもたちのリクエストでアニメの曲を吹いてみる。昔の楽器は昔の曲しかできないという既成概念を外して子どもを喜ばせます。そうすると、自分から、こんなことできる？と興味を示してくれます。家に帰つて、お父さんやお母さんに「雅楽っていうのを聞いたよ」と、もう雅楽という言葉を自然に発しているかもしれない。

子どもは、なんでも純粹にすんと受け入れます。頭というより身体の中にドンと収まる気がするんです。そのときに興味をもつかは関係なく、それが何年後か何十年後かに、何かのきっかけでふと芽生えることがあると僕は信じているんです。ですから、子どもたちには本当にいいものを与えたい。食事でも、心のこもった味のものを知るとそれが基準になりますよね。純粹な時期にいいものを知らせたいんです。だからこそ、学校にも専門家を呼んで、本物を披露する場をつくつてほしいと強く思います。

伝統文化に親しむことが学校教育でも重視されるようになったそうですが、今、僕は各地の学校で雅楽を聴いてもらう活動にも力を入れ始め

ています。依頼を受けたら喜んで行きます。先生たちにも、たくさん知つてほしいことがありますよ（笑）。

**伝統文化である雅楽を、子どもたちにどのよう
に聴いてほしいと思つておられますか。**

雅楽というと難しく、かしまつて聞かなければいけない、伝統があるからすごいと思わなければならない、という方も多いんですが、自由に聴いて、好きなように味わってもらえればいいんです。好きじゃないならそれでいいし、何年後にまた雅楽を聴く機会があったら、ああ、以前これを聴いてこう思つたな、と思ひ出してもらえばいいんですよ。

ただ、伝統というのは、たくさんの人たちが、長い間、おもしろい、かっこいいと思つたから今まで続いてきたものであり、これからも続いていくであろうものです。そのことを少し頭に置きながら、感じるままに聴いてほしいですね。

僕の演奏で、子どもたちが雅楽に何かの魅力を感じてくれたらうれしいですね。「また来てね」と言ってくれたり、後で手紙をくれたりしたら、すごく励みになるんです。

デジタル教科書

デジタル教科書の 現状と期待



富山大学人間発達科学部准教授
高橋 純

デジタル教科書とは

文部科学省が示した「教育の情報化ビジョン（骨子）」（2010年8月）によれば、デジタル教科書とは「教科書に準拠しているものの、法令上は、教科書とは別の教材に位置付けられる」とされる。したがって、「教科書」という用語からイメージされる「文部科学大臣の検定」「無償給付」といったこととは異なる教材といえる。

そして同ビジョンによれば、主に教員が授業で提示して使うための「指導者用デジタル教科書」と、児童生徒が一人一台の情報端末を用いて学習に使う「学習者用デジタル教科書」に分けられるとされる。

現在、販売されているデジタル教科書は、すべて「指導者用」である。「学習者用」は、試作や試用が始まった段階である。本稿では、この2種類のデジタル教科書の現状等について述べる。

指導者用のデジタル教科書

現時点において、多くの教員に関係があるのは、指導者用デジタル教科書であろう。

「教育の情報化ビジョン（骨子）」によれば、指導者用デジタル教科書とは「教科書の内容を引用しつつ、任意箇所の拡大、任意の文章の朗読、動画など、わかりやすく深まる授業に資する機能を有している」とされる。

現在、これらの機能を持った指導者用デジタル教科書は、新学習指導要領の完全実施に伴う教科書改訂とも連携しつつ、教育出版を始め、多くの教科書会社が発売を行っている。指導者用デジタル教科書を、電子黒板やデジタルテレビ等で拡大提示しながら教えることで、児童生徒の興味関心を高めたり、教員の指示を明確にしたりし、従来以上に充実した授業の実現を支援する教材として期待されている。

まずは指導者用デジタル教科書の活用を

指導者用デジタル教科書は、学習指導に効果的な機能等が実装されると共に、実践事例

も増えてきている。

まずは、電子黒板やデジタルテレビ等を用い、デジタル教科書の図や表などを「拡大提示」することが、最も効果的で日常的な活用方法である（図1）。その際に、教員は適切な「発話（指示・説明）」をしながら、「指示」などをすることが必須である。これにより、発話だけでは伝えきれなかったことを、大きく映された図表等を加えて伝えることができる。

これらは、指示を明確にしたり、説明をわかりやすくしたりすることが主な効果となる。つまり、指導者用デジタル教科書の最初の活用は、直接的に学力向上を狙うよりも、一コマの授業で何度も行いう指示や説明のレベルを上げ、わかりやすい授業や密度の高い授業を実現すると考えた方が現実的である。また、授業スタイルを大きく変化させることもないことから、多くの教員にとっても活用しやすい。

ここで明確な指示等の重要性について述べたい。図2は筆者らが2社の小学校算数科の教科書における文を「指示」「説明」「問いかけ」に分類したものである。算数科の教科書の文は「比べましょう」といった指示が最も多い。明確な指示は、数多くの授業場面で必要とされているといえ、より本質的な思考する時間の確保にも貢献できるだろう。

さらに、指導者用デジタル教科書によって、



◀ 図 1

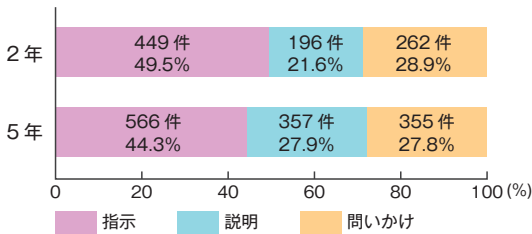
児童生徒の題材への興味関心を高めるためには、教員の発問や、図表等などの部分を拡大提示するといったことがポイントになるが、こういった活用や、さらに高度な活用は、前述のような活用を繰り返して経験を積むことが大切になる。

学習者用デジタル教科書

日本において、学習者用デジタル教科書開発の契機となったのは、2009年12月に、当時の原口総務大臣が示した「原口ビジョン」であろう。ここに「デジタル教科書を全ての小中学校全生徒に配備」と示された。

「教育の情報化ビジョン（骨子）」では、学習者用デジタル教科書について「子どもたち

算数の教科書の本文の構成 (T社+K社) ◀ 図 2



◀ 図 2

一人一人の能力や特性に応じた学び、子ども同士が教え合い学び合う協働的な学びを創造していくためには、子どもたち一人一人の学習ニーズに柔軟に対応でき、学習履歴の把握・共有等を可能とする」といったコンセプトが示されている。

諸外国の現状であるが、筆者らの訪問調査によれば、韓国が最も先行しており、既に100校以上で実証実験を行っている。また、教育分野におけるICT活用の先進国であるシンガポールは本年2011年から開発がスタートとのことである。同様に日本のICT活用のお手本となっている英国では、そもそも国定の教科書がないことから、その代わりとなるデジタルコンテンツの開発が以前から活発である。しかし、指導者用が中心である。

学習者用デジタル教科書への今後の期待

世の中のデジタル化の流れや、今後10年、20年というスパンで考えれば、教科書がデジタル化されることは、教科書のすべてかどうかは別としても、避けて通れないだろう。「教育の情報化ビジョン（骨子）」における学習者用デジタル教科書のコンセプトは、

教育方法の改善にすることが中心といえる。それに対して教育内容を記述することが中心である教科書が、どのような役割を果たせるのかは慎重に見極める必要がある。

一方で、ICT活用に関する研究からみると、このコンセプトに近い個別学習・支援や協働学習システム等は、過去にも多くの研究開発が行われてきた。しかし、成果はみられるものの、大きな普及には至っていない。したがって、教科書とこれらのシステムが連携した学習者用デジタル教科書は、期待される場所ではある。今後、実現に向けては、各教科の目標、内容、時数との関係をはじめ、種々の課題の検討が必要となるだろう。

また、多くの教員は、このコンセプトに示されるような教育方法の重要性は認識しており、既に限られた条件の中で、創意工夫を行い、改善を試みている。多様な学習活動を適切に組み合わせたりするなどの成果もみられる。これらの経験から直感的にも、教科書の改善は必要であるとしても、教科書一つだけで実現できることでもないと感じていると思われる。

学習者用デジタル教科書は、紙の教科書以上に、児童生徒の能力向上に役立つ可能性がある。しかし、そのためには、将来を見据えるのみならず、これまでの研究成果、現状の授業なども分析し、丁寧な研究開発が求められているといえる。

デジタル教科書

デジタル教科書の活用と課題



東京都港区立高輪台小学校校長
井上 文敏

新学習指導要領と授業の改善

平成23年4月に新学習指導要領に基づく教育課程がすべての小学校において実施された。今回の改訂は「生きる力」を育成すること、知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力の育成のバランスを重視すること、道徳教育や体育などの充実により、豊かな心と健やかな体を育成することを基本的なねらいとしている。

特に知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を育成し、主体的に学習に取り組む態度を養うために、子供たちがICTに慣れ親しみ活用す

ることができよう適切な指導を進めるとともに、情報通信技術の特性を理解して各教科の指導に活用するなど、学習指導の効果を高める研究を重ね、授業充実のための改善を図ることが求められている。

ICT環境の充実とデジタル教科書

文部科学省はこの2月に「教育ICT活用実践研究―全体報告会―」を開催するなど、各地域におけるICT活用実践研究校の成果報告や協議会等を通して情報交流を進め、ICTの教育活用を推進している。

現在、各学校においては電子黒板、デジタルテレビとともに、様々な機能をもった機器が教育委員会の計画のもとに導入されている状況である。

また、「学校教育の情報化に関する懇談会」は「教育の情報化ビジョン」の提案とともに、提案で示した内容を具体的にするためにワーキング・グループを発足させ、①教員支援、②情報活用能力の向上、③デジタル教科書等についての検討をまとめている。

デジタル教科書・教材、情報端末等に関しては、次のようなポイントを示している。



電子黒板の活用

(1) 授業像・指導法

情報通信技術を活用しながら、一斉指導に加えて、一人ひとりの能力に応じた学び（個別学習）、子供同士による意見交換、発表などによる互いに高め合うような協働的な学びを重視した学習を創造していくようにする。

(2) デジタル教科書・教材等の機能

- ・ 学習者用、指導者用デジタル教科書に分けて期待される機能を示している。
- ・ 学習者用の機能としては、
- ・ 音声を再生する機能
- ・ 学習内容の理解を図る動画や立体を示す機能
- ・ 文字や画像等の拡大機能
- ・ 表やグラフ、作図、描画機能
- ・ 辞書や参考資料機能
- ・ 子供たちの理解やつまずきに応じて教材が提示されるなど習熟に応じた学習機能
- などを示している。

これに加えて指導者用では、

- ・ 子供たちの活動（書き込み、学習成果）を把握・分析できる機能
- ・ 教員が必要に応じて教材を作成できる機能
- などが加わることが期待されている。

また、子供たちが学習内容について振り返りができ、予習や習熟度別の学習課題が提示など多様な使い方が期待できるとともに、デジタル教科書・教材が、実験や観察を含めた体験や子供相互のコミュニケーション機会を

軽視しないような使い方と指導が求められてくる。

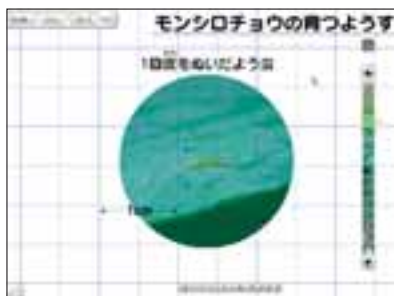
デジタル教科書の活用の実例

この4月から、教科書紙面をインターフェースにした指導者用デジタル教科書を、改訂に合わせて発行しようとしている。

この指導者用デジタル教科書は、主として教員が、電子黒板・デジタルTV等で児童に提示しながら活用できるように工夫されている。特に、教科書の内容に合わせて一部を拡大したり、文章を朗読したり、理解を深めるための動画を加えたりするなどの工夫がされている。

ここでは、本校で計画しているデジタル教科書を活用した指導計画をもとに、その活用例を第3学年「チョウを育てよう」、第4学年「月と星」の単元から示すことにする。(理科デジタル教科書 教育出版)

(1) 「チョウを育てよう」 第3学年



モンシロチョウ グラフ表示の方眼から大きさが分かる活用

・「モンシロチョウの育てようす」のすべての写真を一つの画面で示すことができ、成長過程を拡大して写し、特徴を共有することができきる。
・「グラフ」表示を活用することによりマス目

が表示され、拡大しても大きさを理解することができるとともに、「実際の大きさ」を見ることで大きさを実感することができきる。

・「ペン機能」を活用することにより、注目させたい部分を強調することができきる。

・「ズーム」「図形」機能を活用して観察カードを拡大表示し、観察の視点や書き方の指導を行った後に観察させるようにする。

※デジタル教科書の活用は、実験・観察の視点や理解・表現力を高めるために有効であるといえる。

(2) 「月と星」 第4学年

・既習事項である太陽の動きを動画のように見ることにより、月の動きへの関心を高める。

・「方位磁針の合わせ方」「高さの目安」を拡大して示し、調べる方法を正しく共有することにより正確な記録をとることができきるようにする。

・子供の生活時間では、すべての動きを観察

することができな

いため、「月の動き」「星の動き」

では、動画機能を活用しながら確認していく。このことから、月の動きは太陽の動きと似ていることや、星の位置は変わる

が、並び方は変わらないことなどの理解を深めるようにする。

※一斉指導での観察方法の理解や動画機能を用いて、理解の充実を図るように工夫した指導を進める。

教員の授業力向上と児童の学び合う力の育成

ICT環境がどんなにすばらしくなっても、それらを活用するのは教員であり、教員の授業力である。単元で育てるべき能力は何か、そのための学習課題をどのようにつかませていくか、学習過程はどのように構成し、板書はどう進めるか、一人一人の子供の学習状況をどのように評価していくかなど、学習活動を支える教員の授業力の向上は、学習するための環境がどのように変わっても変わらず、常に求められているのである。このため、学校では、学校としての課題を解決するための校内研究、学校研究において教員の授業力向上とICT活用を関連させながら進めていく必要がある。

また、学習活動は相互作用である。ICTは、豊かな情報を提供するだけでなく相互作用の場を提供してくれる。指導にあたっては、単なる情報提示から子供相互の学び合いの場を構成するなど、対話をつくる活用や相互作用を生み出す場を構成するようなICT活用、授業の改善を進めていくことが重要である。

●一人の百歩より百人の一步

私は、地雷廃絶のために「自分にできること」で活動を行っている。街頭募金、ピアノ・リコーダー寄付、講演等、活動内容は様々であるが、日常の中でできることに、その都度、精一杯取り組むようにしている。しかし、私一人が躍起になっていてもなかなか改善する問題ではない。世界中の人が「地雷廃絶」を声に出すことで、地雷除去年数（地雷廃絶を完了するまでの年数）は飛躍的に短くなるのだ。一人の百歩より百人の一步の重要性を感じる。

活動の中で、現地にも数回足を運び、地雷原や学校を視察した。カンボジアの子どもたちは、地雷や貧困といった言葉を吹き飛ばすような、キラキラした笑顔を持っていた。学校の授業見学後、生徒の家にお邪魔すると、「見て」と一冊のノートを手渡してくれた。何度も消しゴムで消しては再利用したのであろう、少しくたびれたノートには、算数の数式がびっしり書き込まれていた。学校は楽しいかと聞くと、楽しい、勉強が大好きだという。私が出会ったカンボジアの生徒は、みな真面目で、勤勉であった。風を揚げながら走り回る子どもたちを見て、本当にここに地雷さえなければ、と切実に感じた。

私の夢の一つは「地雷のないカンボジアを見てみたい」ということである。しかしこれは、実現できる夢なのだ。国連地雷対策サービス部（UNMAS）のマックスウェル・カーリー氏は「地雷の短期撲滅は実現可能な目標」としており、地雷問題はアクションしだいでは早期解決する問題であるといえる。より多くの人に「自分にできること」を考えてみてほしい。

●「地雷をつくった人が地雷の被害に遭えばいい」

2003年に滋賀県で開かれた「地雷をなくそう！全国子どもサミット」に参加した、アフガン出身のナディル（当時16歳）がこう語った。「地雷をつくった人が地雷の被害に遭えばいい。そうすれば僕の気持ちが分かるから」。ナディルは6歳の時に被雷している。地雷問題をどう解決すべきか、今後の展望を話し合う中で出た言葉だった。私は辛辣な言葉にいささか衝撃を受けた。

世界には6千万～1億個といわれる地雷が埋設されている状況にあり、1時間に2人から3人が地雷



による被害を受けている。オタワ条約が制定されてから十数年、地雷問題はブームが衰退するように、過去の問題になってしまいつつある。除去法としては、現在、人の手での撤去が中心となっている。しかし、この方法では、1年間に除去できる地雷数は約30万個ほどが限度とされており、現在埋設されている地雷の全撤廃だけでも、道のりは険しい。そして、さらに地雷は製造中なのである。

今日、深刻とされる教育現場の人材不足は、今、日々切磋琢磨している子どもたちが大人になるころには改善の方向へ向かっているかもしれない。しかし、運動場に、通学路に、校舎裏に埋設された地雷は、何か行動を起こさねば、月日がたっても解決するとは考えにくい。

被雷するとはどういうことなのか、ナディルの言葉を思い出した。彼の言葉には、被雷した悲しみ、地雷やその被害者をなくしたいという強い気持ち、なかなか改善しない状況への歯がゆさ等、表現しきれないほどの多様な想いが詰まっていると感じた。

全世界に眠る地雷の数は膨大であるが、その中の一つの地雷を撤去すると、一人は、悪魔の兵器による被雷をせずに済む。各国NGOの働きかけにより、被害者数は年々減少しているものの、新たな地雷を踏んで、手足を失い、悲しんでいる人はまだまだ多いのである。そして、地雷の存在が、教育を含む国の発展を妨害し、貧困を深刻化させているのだ。これらのことを再認識し、再び問題意識を喚起する必要性を感じているところである。🌸

柴田 知佐

愛知県岡崎市出身。愛知教育大学附属岡崎中学校、光が丘女子高校、立命館大学卒業。小学校5年のとき、長野冬季五輪聖火ランナー、地雷で右手足を失ったクリス・ムーン氏の走る姿に感銘を受け、自分にできることはないか模索、行動を起こす。自作のポスターやマンガは当時の首相の手にもわたった。大学院生の現在まで、講演や寄付など、継続的に活動。

きょういく 見聞録

地雷廃絶のために、 自分のできることを

—カンボジア等での活動をとおして考える

カナダ・ノルウェー政府と、地雷禁止国際キャンペーン（ICBL）等のNGOによる働きかけにより、1997年に地雷全面禁止条約（オタワ条約）が制定された。しかし、アメリカをはじめとする中国、ロシア等の大国が批准を拒否しているため、地雷全面撤廃は実現しておらず、大きな課題となっている。

私は小学校5年生の時、総合的な学習の時間で地雷について学んだことをきっかけに、「ひとりNGO」として地雷廃絶活動を行っている。ここでは、活動の中で感じたことを、カンボジア等の事例を取り上げながら報告する。日本では近年、オタワ条約批准直後に比べて地雷問題に対する関心低下が著しい。いま一度、この問題について考え、地雷被害が解決された問題ではないということを知ってほしい。

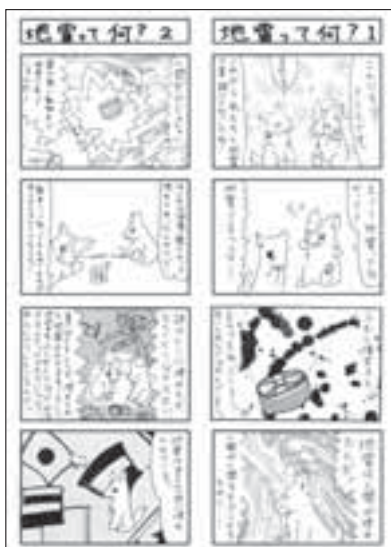
立命館大学大学院 国際関係研究科 修士課程1年 柴田 知佐



● カンボジアの教育、貧困、地雷

カンボジアでは、約20年にわたる内戦と、ポル・ポト政権下において教師・医者・官僚等の知識人が殺害されたことを背景に、紛争後の発展に遅れが生じた。教育においても、現在でも学校設備や教材が足りておらず、十分な体制であるとは言いがたい。校舎の不足も問題であるが、なかでも教育の担い手である有識者が殺害されてしまったことによる人材不足は、深刻である。そのため学校では、1日を2部、3部と分割し、生徒を入れ替えて授業を行うケースが大半である。

教育がうまく普及しないのには、別の理由も存在する。村落地域の主な産業は農業だ。豊かな田園風景が広がり、稲穂の緑と青空が視界に半分ずつ、地平線の様にどこまでも続く景色は、カンボジアを象徴する景色の一



小学校6年生のときに描いた自筆のマンガ「ノーモア地雷」。

つであると思う。そこでは、子どもたちが家事や仕事の手伝いをするのが日常であり、牛を操り田を耕す父の後を追ったり、炊事の水を汲むために、大きなバケツを持って、家から井戸を何往復もしたりする。

一見、微笑ましい光景であるが、子どもたちの手伝いは、家庭における貴重な労働力なのである。貧しい家庭では、さらに子どもの負担は増加する。出稼ぎに出かけた両親の代理で、きょうだいの面倒をみたり、炊事・洗濯等の家事をしたりしなければならないからである。無論、両親からも、学校へ行くべき時間も手伝いをするのを切望される。

加えて、カンボジアの貧困問題に大きく関連しているのは、地雷の存在だ。観光に並び、農業が主産業であるこの国では、土地は重要な位置付けにある。牛を放牧したり、田畑を作ったりするのに広大な面積の土地が必要なのだ。しかし、そこに地雷が埋設された状態だと、たちまち使い物にならなくなる。土地が使用できないと収入が得られず、深刻な金銭不足に悩まされることになる。貧困が子どもたちの教育を受ける機会を剥奪しているのだ。地雷が埋設されている状態が貧困問題を深刻化させているということは、地雷の存在が間接的に、カンボジアの教育促進を阻んでいるといえるのではないだろうか。

神奈川県鎌倉市 NPO 法人 鎌倉てらこや

多世代参加のてらこやコミュニティが 学校・家庭・地域を結ぶ

「鎌倉てらこや」は2003年、「親が育ち、子が育つ地域をつくろう」と立ち上げられました。

早稲田大学・横浜国立大学などの学生や青年会議所、市民ボランティアなどで運営し、地域の協力を得て、子ども・若者・大人がともにいきいきと学び、遊び合える「多世代をつなぐ居場所」となることをめざして活動しています。



▲ごはんはおにぎりにし、小松菜の漬物と練り梅を添え、昆布茶をかけてお茶漬けに。70人分、一生懸命にぎりました。

▼揚げギョウザの中身は、納豆、アスパラ、里芋、かぼちゃ、そしてチョコバナナ。食材を目の前を見ると、子どもたちから次々にアイデアが出てきたそう。



思いっきり学び、遊べる場を

「てらこや」の基本的な活動は、子どもたちの「居場所づくり」。土・日曜に拠点の「てらハウス」に、子どもや学生たちが集まり、「2時間学んで、4時間本気で遊ぶ」をモットーに、思い思いに過ごします。

その他にも、陶芸や朗読、里山探検や合宿などの、鎌倉の文化・自然を生かした多彩な活動が行われます。活動に欠かさないのは、鎌倉周辺のお寺や神社、他のNPO団体、芸術家、小学校や大学などの協力。子どもや学生の自由な発想は、周囲の協力を得て実現されます。

「体感」が子どもを育む

「ごはん、ぴかぴかだー!」「はやく食べたい!」2月19・20日に行われた、鎌倉の由緒あるお寺、建長寺での合宿は、「都会と田舎を結ぶ食育ネット」との共同事業。坐禅などの修行や、子どもたち自らメニューを考えた精進料理づくりなどを体験しました。

昨年夏には、愛媛県内子町周辺で田舎体験。農林漁業体験で自分たちの「食」がどのようにつくられるのか、学生ボランティアとともに体感した、その集大成がこの建長寺合宿です。

愛媛から送られた食材と、地元鎌倉の食材を使い、学生のサポートを得ながら調理。ごはんは、夏の愛媛の体験で子ど



1



2



4



3

1 お寺の規律で動く時間と遊びの時間は、きっちりけじめがついています。遊びの時間には、学生ボランティアさんも一緒に思いっきり遊ぶ！

2 具がたっぷり（にんじん、大根、ほうれん草、しいたけ、ごぼう、たまねぎ、こんにゃく、白滝）のコンソメスープ。がんばって野菜をたくさん切りました。

3 炊き上がったごはんはあつあつ。お米は、愛媛の小田先生の田んぼで、自分たちの手をかけてつくったもの。手間をかけた自然乾燥のお米は、びかびか、もちもちです。

4 てらこやでは、異年齢の子どうしの交流も特徴のひとつ。年上の子が年下の子どものめんどうを自然にみています。

5 自分たちでつくった料理は、やっぱりおいしい！思わず笑顔がこぼれます。

6 お茶漬けにぎょうざ、コンソメスープ、おでん、里芋と白滝の煮物と盛りだくさんのメニューも、どんどんなくなっています。



5



6

- NPO 法人 鎌倉てらこや
<http://kamakura-terakoya.net>
- 都会と田舎を結ぶ食育ネット
<http://syokuikunet.web.fc2.com/>

も自身が田んぼに入って世話したお米を炊きます。自分たちが生産・調理にかかわったものだからこそ、箸もどんどん進みます。

「食育ネット」会長の小田清隆先生（愛媛大学農学部准教授）はこう話します。「農林漁業を体験した子どもの話を聞いて、保護者も変わるんですよ。親子で、生産地の天候などを気にしてくれるようになるんです。自らが生産にかかわったものをいただく体験が、食材のストーリーを感じ、生産者のことを思いながら食べることにつながります。」

いつも違う世界に目を向けよう！

てらこや活動のもう一つの重要な側面が、多世代の交流です。てらこやでは、子どもたちは異年齢の子や異なる世代の人と自然に溶け込んで過ごします。「ボランティアの学生も、子どもたちのサポートを通しての成長はもちろん、先輩世代である保護者との交流から学ぶことも多いんです。」と、学生ボランティアから鎌倉てらこやの事務局長になった、上江洲慎さん。

「てらこや活動」は全国に広がり、「全国てらこやネットワーク」も、内閣府認証NPO法人としてスタートしています。鎌倉てらこやでも、全国のてらこや活動と連携。地域や文化の多様性を感じる交流の場の充実に、ますます期待が高まります。



保幼小中一貫環境教育カリキュラムの策定

板橋区教育委員会指導室指導主事 小池 木綿子

東京都

板橋区では、平成20年2月、板橋区環境教育推進プランに基づき、ESD (Education for Sustainable Development : 持続可能な開発のための教育) の考え方を重視した小中一貫環境教育カリキュラムを策定しました。環境教育テキスト「未来へⅠ・Ⅱ・Ⅲ」を作成、区内全小中学校に配布し、小学校3年生から中学校3年生までの環境教育を教育課程に位置付け、推進しています。

板橋区における環境教育では、FEEL (関わる・知る・感じる)、THINK (主体的に問題解決をする)、ACTION (これまで身に付けた力を活用し、行動に移す) という3段階を大切に、環境の視点を「循環・多様性・生態系・共生・有限性・保全環境」として、環境についての感受性と共生や思いやりの心、環境に対する見方・考え方、環境に働きかける実践力を育成することをねらいとしています。

平成22年度には、さらに就学前からの環境教育を重視し、「幼児・児童・生徒が11年間で身に付ける資質・能力・態度」を明確にした、11年間にわたる

保幼小中一貫環境教育カリキュラムを策定しました。

11年間のカリキュラムを、感受期(前期)／感受期(後期)／認識・問題把握期／評価・意志決定期の4期に分け、特に「感受期(前期)」にあたる4歳児から小学校2年生までの4年間では、自然に親しみ触れ合う機会や場を設定し、感性を養うことを目標としました。そして、多くの体験活動を通して、環境についての豊かな感受性や環境に対する気付きを系統的に身に付け、小学校3年生以降の環境教育に必要な素地を育てていきます。

今後は、「板橋区保幼小中一貫環境教育カリキュラム」と実践事例を区内保育所・幼稚園及び小中学校に配布し、板橋区に在住する子どもたちに対する環境教育を、より一層推進していく予定です。



「土曜スクール」の開設

南房総市教育委員会学校教育課

千葉県

「一つの教科にしぼり細かく教えてくれる」「テストをしてその範囲を完璧になるまで教えてくれる」土曜日の12時、公民館の教室から出てきた生徒が口々に話します。

この生徒たち、公民館でどんな時間を過ごしてきたのでしょうか？

「学習機会・学習刺激の少ない過疎地の子どもたちに学力向上を図る方法はないだろうか?」「部活動や習い事ではない、休日の過ごし方を提案できないだろうか?」

平成22年7月、南房総市教育委員会は、市内中学校とそのPTA



に、進学塾と連携した「土曜スクール」について提案しました。土曜スクール」では、任意団

体の運営委員会が参加生徒の希望を取り、進学塾に講師派遣を依頼し、参加者が講師への謝金を払います。教育委員会は、公民館の会場を提供しますが、運営はあくまで保護者・地域の方々です。

各中学校では、この提案を受けて、職員やPTA役員との話し合いに入りました。中でも富浦中学校では、PTAや地域の皆さんと協議を重ね、いち早く運営委員会を組織して、土曜スクールを行うこととしました。

平成22年10月2日(土)9時。同校と隣の富山中学校の3年生合わせて18人が公民館に集合。英語、数学、総合補習や学習の進め方指導など、3時間の学習を開始しました。この学習は、受験期の2月まで、約20回行われました。

その後、土曜スクールの取り組みは、3会場で5校の中学生に拡大しました。

南房総市教育委員会では、参加生徒や保護者及び教育関係者のアンケートを行い、今年度からは、学年や地域を拡大して、広く学習機会の充実と、学力の向上を図っていきます。



学校と地域をつなぐ「あいさつの花満開プロジェクト」

愛知県

豊橋市立新川小学校校長 白井 正康

新川小学校は、平成18・19年度に学校評価システム構築事業の研究協力校となり、より質の高い教育の提供をめざして、いろいろな学校改善を展開してきました。その中の一つに「新川からあいさつの花を咲かせよう」を合い言葉にした「あいさつ運動」があります。毎週水曜日の「ごきげん集会」では、子どもたちの元気なあいさつの声が体育館いっぱいに響きわたります。

22年度は、子どもと先生が一緒になって「あいさつの花満開プロジェクトチーム」をつくり、「あいさつの花」を地域や家庭に広げようと企画しました。目玉は「ポストカード」です。「ポストカード」には「あいさつ標語コンクールの優秀作品」と実行委員会の子どもが描いたイラストが載っています。このポストカードは13種類あり、いずれも子どもたちの心がこもった作品です。この「あいさつ標語コンクール」の審査会には、実行委員会の子どもはもちろんのこと、子ども会代表やPTAの役員の方々など、審査の段階から地域の人々にも参加をしていただきました。

子どもたちは、これらの「ポストカード」に便りを書いて、地域のお年寄りや自治会の人々へお届けをしました。地域の人々から「かわいい贈り物をいただきました。これからも地域で子どもたちをしっかりと見守っていきます」という内容の返事の手紙が多く届きました。1枚の葉書によって、子どもと地域が結ばれることを実感しました。

その他に「あいさつの花満開プロジェクト」での取り組みとして、あいさつ集会の開催、あいさつの花企画、缶バッジづくりなどの多彩な活動を展開しました。これからも地域に発信できる「あいさつ運動」を展開していきたいと考えています。

地域で「なくてはならない存在」に
—ゴミ出しボランティアをとおして—

東京都

立川市立若葉小学校校長 井上 和芳

若葉小学校は昭和46年、隣接する若葉町団地とともに建てられました。一時は本校の児童数も1000人を超えていましたが、年月とともに団地は子育て世帯が減り、現在は児童数180人と少なくなっており、団地は高齢者が多くなっています。

平成12年、若葉小では「総合的な学習の時間」の中で、子どもたち自らが、地域のゴミ拾いを行う「ゴミゴミ探検隊」というボランティアグループを立ち上げました。子どもたちは活動中に、隣接する団地のお年寄りが、ゴミ出しに苦労している話を聞いた



のです。「杖を使いながらのゴミ出しは大変」「階段の昇り降りがつらい」などのお年寄りの声を聞いた子どもたちは、

週2回、ゴミ出しを手伝うようになりました。

現在、希望者で構成するボランティアサークルの子どもたちが、学校へ行く途中にお年寄りの家に寄ってゴミを受け取り、ゴミ置き場へ持っていく活動を続けています。身軽な子どもたちにとっては、5分もかからない簡単な活動です。しかし、お年寄りたちは、ゴミ出しに立ち寄った子どもたちに笑顔で何度も頭を下げてくれます。自分たちにとっては何でもない行動が、お年寄りにはどれだけ大変なことなのか。ていねいにお礼を言われ、子どもたちには、お年寄りの暮らしや体を思いやる気持ちが生まれてきます。

この他にも、若葉小学校では、毎月第3金曜日に、団地のお年寄りとの交流給食「ふれあいフライデー」などを実施しています。顔見知りになったお年寄り子どもたちが、道すがら笑顔であいさつし合う光景も、すっかりおなじみになりました。地域の中で、若葉小学校が「なくてはならない存在」になっていることを、子どもたちは肌で感じています。



地球となかよし ゼミナール



子どもたちのメッセージに学ぶ

子どもたちの思いのこもった「地球となかよしメッセージ」。
応募いただいた学校の取り組みを紹介します。

手間ひまかかるエコ活動も 少しの工夫で楽しみながら

賤機中小学校は、安倍川の中流に位置する山あいの小さな学校です。周りの自然の豊かさを生かしながら教育活動を進めています。運動場にある銀杏を集めての募金活動、アマゴの飼育・放流、安倍川の水质調査など、地域の人の協力を得ながら取り組んでいます。私たちの学年は、環境学習をメインに総合的な学習を行ってきました。こどもエコクラブにも入り、身近な自然から視野を広げ、環境学習を進めました。そして、地球の状態を知り、キッズ・ISOにもチャレンジしました。そんな学習を進めている中で、子どもたちは、エコキャップ推進運動を見つけてきました。自分たちも集めたいと言いつけました。もう少し詳しく調べてみることにしました。すると、このリサイクル活動による収益金がワクチン代となり、世界の多くの子どもが命が救われることがわかり、エコキャップ運動

に取り組みことになりました。はじめは、面白がって調子よく集めていた子どもたちでしたが、日が経つにつれ、だんだんとマンネリ化してきました。何かいい手立てはないかなと思索していたところ、子どもたちは、キャップの色や模様が面白いことに気づきました。そこで、これを並べてきれいな模様にならないだろうか考えました。すると子どもたちは、楽しがってキャップを分けてくれました。そして、これを使って絵を描いてみようということになりました。名付けて「エコキャップアート」。

色分けする子。並べる子。みんなで役割分担して積極的に活動し、にっこりと笑う地球の絵をパネルに完成させました(写真上)。子どもたちは、大喜び。キャップ集めがまた活発になりました。

そこで、今度はグループになって、地球に
対するメッセージを作ろうということになりました。その作品の一つが、「水神と富士山」です。環境学習で学んだ「地球にとって大切なものは、水だ。」というメッセージを、水神である龍と、たくさんわき水を蓄える富士山に込めた作品に仕上がりました(写真下)。この活動を通して子どもたちに身につけてもらいたかったのは、「今、自分たちができるエコ活動をするのが当たり前だ」という感覚です。「地球は大切だからエコ活動をしなくてはいけない。」という合い言葉だけでなく、実際に活動を行うことに価値がある、ということでした。

少しぐらい手間ひまがかかっても、そこからさらに新しいものを自分たちで生み出す工夫をすることで、この地球でよりよく生きていくことができる。そういう人になってもらえればと願っています。

楽しんで作成した「エコキャップアート」



地球となかよしメッセージ 2010
全国小中学校
環境教育研究会賞



水神と富士山

6年

福井 みゆ子・榎林 一皓・杉山 菜々美・久保田 栄一・繁田 龍秀

わたし達は、エコキャップ運動に協力しようといっしょうけんめいにキャップを集めました。ただあつめるだけではつまらないのでキャップをならべてメッセージを作ることになりました。そこで、わたし達のグループは、地球にとって水が一番大切だと思って、それを表げんしようと思いました。思いついたキャラクターはりゅうと富士山です。りゅうは、水神さんとして水を守ってくれます。富士山の周りには、わき水がたくさん出るきれいな所です。いつまでも、きれいな水を守っていけるようにしたいです。

※学年は 2010 年度当時

静岡県
静岡市立賤機しずはたなか中小学校教諭
増田 規

コラム

いまどき コドモ事情

子どもの不安 そのまま受けとめて



香山 リカ
(精神科医・立教大学教授)

日本を襲った未曾有の大災害。

日本中の人々が、多かれ少なかれ、これまでとは違った生活を送らなければならなくなった。被災地の子どもの中には、学校が丸ごとなくなってしまう子、地元を離れて遠い場所の学校に移る子もいる。被災地以外の子どもでも、余震、停電や節電の影響を受けて、これまで通りの学校生活や家庭生活が送れなくなっている場合がある。

「いやいや、ウチの地域は震災の影響も停電もない」という人もいるだろう。そういう場合は、子どもは「これまで通り」と考えてよいのだろうか。それは違う。震災以降、さまざまな衝撃的な映像や情報を目にし耳にして、子どもたちの心はすっかり疲れきっている。

私のまわりや診察室にも、直接の被害は受けなかったのに心身の不調を訴える子どもが大勢いる。すっかり無気力になってしまった、子どもがえりして親にベタベタする、突然、泣き出したり怒り出したりする、食事を摂らなくなったかと思うと過食をしたり、と不安定、などなど。こういった子どもたちは、この災害を見聞きしたことによ



り、すっかり心が傷つき、トラウマになってしまっているのだ。

このように、いろいろなレベルで傷つき、疲れきっている子どもたちに、どう新学期を迎えてもらえばいいのか。まわりの大人たちも悩むところだろう。

まず、子どもだからといってウソをつくのはいけない。被害の規模を隠したり、「何ごともなかった」という態度を取ったりするのはすすめられない。ただ、そこで大人までが悲観的になるのではなくて、「だいじょうぶ、必ず日本は立ち直れるから」と励まし、力づけることは忘れないでほしい。できれば、「あなたにもできることは何だろう？」とそれぞれが役割を持てるのもっとよい。

そして、もし子どもがいつもより甘えたりワガママを言ったりしても決してとがめず、まずはゆっくり時間をかけて、気持ちを休ませてあげてほしい。そのためには、テレビを消して、楽しい時間を持たせる工夫も必要だ。子どもたちは、とても疲れていることを忘れないでほしい。

第9回

地球となかよしメッセージ

作品募集
(2011年度)



「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたことを、写真(またはイラスト)にメッセージをつけて表現してください。

◎主催/教育出版 ◎協賛/日本環境教育学会
◎後援(予定)/環境省、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日新聞社、毎日小学生新聞
*2010年度の作品集についてのお問い合わせは Educo編集部(03-3238-6982)へ。

応募期間
2011年
7月1日～
9月30日



応募の決まりなど詳しくはホームページを見てね

「地球となかよし」事務局



教育出版

<http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/>

入賞作品は Educo2012 年冬号(2012年1月発行予定)で発表します!

ほっとな

出会い

不調を乗り越えての山登り区間

箱根駅伝では、山登りの5区を3年連続で走らせてもらい、東洋大は往路優勝しました。一昨年・昨年と、2年連続で区間新記録を出すことができたのですが、昨年はその後、けがもあって不調で、正直、腐りかけていたし、周りの目も負担で、もう走りたくないとも思いました。でも、夏に実家に帰ったとき、周囲の人たちは、僕の不調を知っているはずなのに、「調子はどうだ」とは全く言わなかったんです。「いつまでいるんだ、ゆっくりしていけばいいよ」とか「なんだ、元気がそうじゃないか」とか言ってくれて。本当に心が安らぎました。そんな中で、昔からずっと応援してくれているみんなの顔を見たら、やはりやらなきゃいけないと思っただし、東洋大学に入れたのも、今まで応援してくれたみんながいてくれたからこそだと改めて思えました。僕が走ることは、自分のためでもありつつ、ほかの人の思いも背負っているんだなど。でも、それを重荷にしてみましたら応援してくださっている方に申しわけない。そう思うことができて、また走れるようになったんです。



東洋大学陸上競技部長距離部門

柏原 竜二さん

1989年福島県生まれ。いわき総合高校卒業。東洋大学経済学部4年。箱根駅伝85回大会で5区を区間新記録をマーク、東洋大の初優勝に貢献。翌86回大会も同区で区間新、87回大会は同区で区間賞。新チームでは主将に就任。

走ることによって人生を変えたい

僕は、中学校でもそんなに速くなかったですし、高校で特別に記録が伸びたわけでもありません。でも、そんな中で、結果の出ない自分を変えたいと思っていました。高校時代は貧血にすごく悩まされて、貧血を治したら自分を変えられるだろうか、陸上をとおして、どうやって人生を変えていけるか、そんなふうに思いながら、少しずつ意識やフォームを変えて走っていました。そうするうちに、大学の佐藤コーチが誘ってくれました。それが箱根駅伝で走ることにつながり、ちょっとだけ「自分を変えたい」という願いが現実になつたかと思っています。僕が大学に来られたのは、本当に周囲の人たちのおかげです。兄弟が多い中、家族が相談して進学させてくれたこと、大学のコーチと高校の先生が話し合ってくれたこと。それらがなければ箱根で走ることはなかった。僕は今、身のまわりのこと全部に感謝しています。感謝を表すのは難しいけれど、それを走りですることができればと思っています。

目の前のことを、一歩一歩

今年の箱根駅伝では、東洋大は総合優勝を逃しました。これからは主将として、一人一人物事を考えて、自分で状況をすばやく判断できるような選手をつくらせていきたいし、そのように皆の意識改革をしたいと思っています。僕は専門知識も少ないし、言葉数も多いほうではない。ですから、自分が走ったり行動したりすることでどうあるのがよいかを示していきたい。自分が他の選手を注意するからには、自分の行動にも責任が出てくるということをしっかりと考えていきたいですね。

来年の箱根駅伝でも5区を走りたいかとよく聞かれます。でも、今は、自分がこうしたいということよりも、まずはチームをどうすればよい方向に持っていけるかを考えたい。主将の僕は、選手でもあり、チームスタッフでもある。監督・コーチ側と選手側の真ん中に立った状態で、客観的にチームを見ていかなければなりません。チームがよい状態になる中で、自分も育っていければという思いのほうが強いんです。

大学卒業後は実業団に進んで、世界選手権やオリンピックにも挑戦してみたい。しかし、まずは、土台をしっかりつくるのが大切、ということに尽きるでしょう。目の前の課題に一歩一歩、しっかりと取り組んでいきたいと思っています。



写真提供：東洋大学広報課

Educo Salon

前号について寄せられたご感想です。

◆静岡市薬科中学校の、地域と一体となった校庭芝生化。「緑の校庭といえば薬科中学校」…自分たちが生活する地域に生きる喜びと活力を見いだせる、心に残る実践だと思えます。(北海道 神原勝三) ◆「地球となかよしメッセージ2010」の入賞作品は、力作ぞろいで、説得力があり、小中学生のみならず感性に心打たれました。応募校の尾道市立高見小の環境教育のご提言にも深く共鳴いたしました。(山形県 佐藤 進) ◆草野仁氏インタビュー。得意なこと、好きなことを伸ばすためには、子どもも努力を惜しみません。最低限の基礎基本の上に、一人一人の長所に目を向けるような学校教育への転換が、今求められているのです。日本人が、世界に伍して活躍できるようにするには、減点方式から加点方式の評価への転換が必要だと思いました。(埼玉県 石川正夫)

なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命のびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。